

善導の還歸往生

齊 藤 隆 信

七世紀の中頃に長安の都で浄土教教化者として活躍した善導は、浄土や往生というごくありふれた言葉を、しばしば別な言葉で標記している。浄土を本国、本家としたり、往生を還歸というようにである。また兩者をつらねて還本国、帰本国とも標記している。このように標記に違いがあっても還本国、帰本国の意味するところは即ち「往生浄土」に他ならない。そして往生浄土という標記に対して還本国、帰本国というときに、このことばからは母国とか、もともと住んでいた所、そういう所に再び帰るといふ印象をうける。こうしたことを念頭において善導がなぜ往生浄土をときとして還本国や帰本国と標記していたのか、即ち従来の通説であった「往く」を「帰る」としたかについて考察する。

善導の「帰る」の使用例を師の著作の中に見れば、総計十二の用例が挙げられる。『観経疏』3・『往生礼讃』1・『般舟讃』4・『法事讃』4・『観念法門』には見あたらない（紙数の制約上このうちの四例ほど示せば、①「又讃云歸去來魔郷不可

停」〔観経疏〕、②「寄言有縁同行者努力翻迷還本家」〔往生礼讃〕、③「慶得人身聞要法頓捨他郷歸本国」〔般舟讃〕、④「去來他郷不可停從仏歸家還本国」〔法事讃〕などである。どれもみな魔郷たる娑婆を厭離することの対句として「帰る」の標記がなされているのである。また①については東晋陶淵明（365—427）や六朝詩との関係をも考える必要があろう。

さて前述のごとく還本国、帰本国ということばから本来の居場所に戻るといふ印象を受けるのであれば、善導がこうした標記をする裏にはこの娑婆に往んでいる我等が、元來は浄土の住人であるということを用意させているであらう。ところがそこが問題で、善導の機根観によればこの娑婆に往む人間を規定して、曠劫より三界に沈み輪廻を繰り返し仏や仏法とは無縁の凡夫であるとしている。この機根観からすると、輪廻の凡夫が本来の住居たる浄土に帰るなどという標記はどうもふさわしくないわけである。娑婆世界こそ本国母国とし

ているはずの凡夫が、浄土の本国へ帰るといふことはいったいどうしたことであろうか。善導が自己矛盾を犯しているところか。そこに問題があると考えられるのである。

この一見して善導の自己矛盾とも思えることは既に五部九卷末書において指摘されている。『観經疏伝通記』（浄全2・31下）に「問始生浄土何云帰耶」とあるごとく、善導の機根觀によれば一切衆生は曠劫流轉の凡夫であり、六道を棲としてきた存在である。しかるになぜ「帰る」と標記するののかとの問いである。これに答えて「先師云是約能化」、それによると「約能化」、即ち来迎せる弥陀を中心に考えていたからである、とするのが先師聖光の解釈だというのである。（ただし聖罔は『釋鈔』で能化を垂迹の善導とする。）

次に良忠は自己の見解を述べて「悟從本自迷是常他故從穢土他國還歸浄土本國也」としている。つまり、悟りは本来的には自己の備えているものであり、迷いは自己とは関係ない他のものというのである。仏性を備え、けがれない清浄な悟りの姿こそ衆生の本来あるべき姿であるが、その衆生の本来の姿である仏性が煩惱によって覆われているというのである。良忠の解釈は煩惱のない仏性のみの本来的な状態に戻れるということである。このように聖光、良忠は善導の自己矛盾に対処しているも、そこに全く問題がないというわけではない。まず聖光の解釈は、これが先の十二項目の用例に全て当

てはまるわけではない。（たとえば上記の④には当てはまらない）また良忠の解釈については、たしかに玄義分の序題文や『法事讃』で善導は仏性を説いているから、これが善導の教理にそむくものではない。しかし、この良忠のように人間の本来の姿に帰る、即ち仏性とか理性に「帰る」という意味あいをあまりにも強調しすぎると、返って善導の主張する指方立相の事浄土へ往生するということが薄らぎはしまいか。あくまでも善導は「往生浄土」と標記するかわりに「還本國」と標記しているにすぎないわけで、良忠のごとく仏性をもちだして解釈することがはたして善導の真意をくみとっているかという、いささか疑問が残るのである。

ではいかにこの善導の自己矛盾を理解できるのであろうか。まず考えられることは、善導の体験である。この体験の深層性から往生や浄土というかわりに還歸、本國や本家といった標記がなされてくるのではないであろうか。ここではその中から三縁の中、特に親縁について考察すれば、三縁は善導独自の教理にして念仏行をするにつけ仏と衆生が親縁、近縁、増上縁という三つの深い関係をもつということで、仏と凡夫という互いに相反する両者の対面が称名という実践によって現実のものとなると善導は説いているのである。

明親縁衆生起行口常稱佛佛即聞之身常禮敬佛佛即見之心常念佛佛即知之衆生憶念佛佛亦憶念衆生彼此三業不相捨離

こうした親縁の内容は、他に『法事讃』『般舟讃』にも見られる。このように善導は仏との親密さを衆生の身口意の三業において見いだしており、いかなれば仏と衆生の親密な全人格的つながりといえるのである。そしてそれを全身全霊で体験的に感じていたわけである。この善導の体験によって得られた境地から先の用例を眺める時、なるほど体験というものがことばとなって現れていることに気づかされる。つまり本国、本家や還歸といった表現は、他でもなく阿弥陀仏とその浄土に対する親しみから必然的に現れてきたと考えられる。その親しみの情から自ずと還本国、カエルなどというような表現がにじみでてきたといえるのである。

次に考えられることは、総計十二の用例のうち『観経疏』の①を除いて、どれも偈文や讃歎文であることに注目できる。このことから、善導は浄土や往生などの乾燥した一般的な語を用いず、あえて詩的でやわらかく味わいのある標記をとったのではないだろうか。それは他でもなく所化である民衆の為ではなかったか。隋から唐にかけて特にこうした偈頌が広く盛んに行われており、この一種の流行に乗じて教化者としての善導も偈頌を作り民衆教化に役立てたわけで、その際に往生浄土の一般的な標記を、還歸本国と雅語的な標記に改めたのである。こうしたことは浄土教の本質的教理から離れるおそれもあるが、長安の浄土教化者として民衆の中に

身を投じた善導には、時として一片の隙も許さない教理を超越し、宣教者としての顔を持つことは必然的な要求であったはずである。還歸などの標記は詩的情緒を高揚し、民間的レベルで読む者、聞く者、そして往生を願ひ念仏行に励む者の心に強く訴える効果があるわけで、それが偈頌の中に現れていけばなおさらである。これは善導の宣教者としてのささやかな配慮ではなかったか。そしてまた詩人、善導としての繊細な才をも無視できないわけで、こうしたところに教理に束縛されない自由な善導の姿があり興味深く感じられる。

往生浄土は一般的、形式的であり、還本国、歸本国、還歸浄土は個別的、体験的である。還本国などのことばに出あう時、その意味するところは「往生浄土」に他ならないが、そこには人間善導が己の全身全霊をもって阿弥陀仏と対面している姿がある。必ずしも浄土を浄土といわず、往生を往生といわず、ときに体験的な標記をもまじえて本国、本家といい還歸ともいう。それによって善導は自己の教理に血をかよわせていたのである。更にいえばそうした用例のほとんどが偈頌に現れていることからして、偈の雰囲気を高め、同時に浄土を願生する者に対して厭穢欣浄の思いをよりいっそうつづける効果があったとして大過なからう。（略注）

〈キーワード〉 善導、往生浄土、還歸浄土

（佛教大学大学院）